平成２６年３月１１日

各位

神奈川県横浜市鶴見区末広町一丁目１番地 43
株 式 会 社 Ｄ Ｎ Ａチ ッ プ 研 究 所
代 表 取 締 役 社 長　 的場　亮
（コード番号 ： 2397　東証マザーズ）
問 合 せ 先 ： 総務課長　大塚　勉
電 話 番 号 ：(045) －500－5211（代表）

「神経膠腫予後予測方法、およびそれに用いるキット」に関する特許を取得
―バイオマーカーにて神経膠腫患者の術後予後を予測―

株式会社ＤＮＡチップ研究所（社長：的場　亮、本社：神奈川県横浜市）は、悪性神経膠腫の手術を受けた患者様の切除癌から取得した RNA を用いて、腫瘍細胞中の 58 個の遺伝子量を測定することにより、神経膠腫患者の術後の予後を予測（補助療法感受性予測）する方法および測定キットに関する国内特許を取得いたしましたのでお知らせします。

※特許第 5461959 号

３大成人病の一つである癌において、癌の一種である脳腫瘍は悪性となってしまう恐れが高い腫瘍の一つです。この脳腫瘍は、脳組織自体から発生する原発性脳腫瘍と、他の臓器の癌が脳に転移してきた転移性脳腫瘍との２種類に分類されます。この原発性脳腫瘍の中で最も発生し易い腫瘍が神経膠腫であり、悪性の神経膠腫は最も予後不良な悪性腫瘍の一つとされています。神経膠腫は、脳実質に浸潤する特徴があるため、腫瘍を完全に摘出することは非常に困難です。そのため、術後に放射線療法や化学療法を追加することが多くありますが、５年生存率は３８．６％と原発性脳腫瘍全体の５年生存率（７５．７％）の約半分となっており、中でも最も悪性型である膠芽腫(注1)（グレードＩＶ）に限れば、その５年生存率は１０％以下になってしまいます。従来、このような神経膠腫の術後予後を予測するために、予後関連分子を分類し、病理的に予後を診断していますが、他の予後因子と比較して臨床的有効性を確認する手法は確立されていません。そこで神経膠腫患者の術後予後を特定のバイオマーカーを活用して予測する方法を開発し、提供することを目的に特許化に至りました。

本特許では、神経膠腫患者 152 症例の遺伝子発現データを取得し、その発現量の違いから、術後の予後を予測できる 58 遺伝子を選定し、これらの遺伝子の標準化された発現量からなる予測診断システムを構築し、術後予後予測スコアを算出して予後診断方法を確立す

ることを見出しました。さらに各遺伝子の発現量を測定するキット開発を行いました。尚、本特許の発明者は加藤 菊也（大阪府立成人病センター）及び白畑 充章（埼玉医科大学国際医療センター）であります。

当社は本特許を活用し、診断事業分野（RNA チェック）の診断メニュー拡充の一環として、神経膠腫患者の術後予後予測サービスの提供に向け開発を加速し事業を進めてまいります。

以上

(注 1)膠芽腫（こうがしゅ）：脳腫瘍の一種、神経膠腫（グリオーマ）の中でも最も悪性度が高いとされる。